

不安定化する  
「サヘル・アフリカ」

マダレブのアルカイダとその射程  
—「アラブの春」とサヘルをめぐる—

渡邊祥子

●GSPCからAQIMへ

「イスラーム・マダレブのアルカイダ」(al-Qaida in Islamic Maghrib: AQIM)は、アルジェリアのイスラーム主義武装組織「宣教と戦闘のためのサラフィー主義集団」(Group salafiste pour la predication et le combat: GSPC)が、二〇〇七年にウサマ・ビン・ラディンのアルカイダ・グループに加わって成立したジハード主義集団である。首脳部はアルジェリア北部の山岳地帯を中心に活動を続けているが、一部はマリ北部を拠点とし、マリやニジェール、モーリタニアなどのサヘル諸国に進出している。アルジェリアの一武装集団から国際ジハード団体への転換は、どのようにして起こったか。

●孤立からの脱出

AQIM誕生の背景には、九〇年代に一〇万人の犠牲者を出したとされるアルジェリア内戦が二〇〇〇年代に収束に向かい、戦闘が局地化したことがある。ジハード主義集団は、かつてのように市民を標的にする方針を放棄し、アルジェリア当局と外国権益にターゲットを絞るようになった。暴力に倦み疲れた国内の人々の支持と国外の資金支援を失わぬよう、アルカイダの「地方支部」となって生き残りを図った形である。

アルジェリア内戦は、独立後初の複数政党制による選挙である一九九〇年の地方選挙、翌年の国政選挙(一次投票)において、イスラーム政党「イスラーム救済戦線」(Front islamique du salut: FIS)がそれまで実質的な一党独裁を敷いてきた「民族解放戦線」

(Front de libération nationale: FLN)を降し、電撃的な勝利をおさめた事に始まる。政権交代を恐れた軍が、イスラーム国家の誕生を危惧する「国際社会」の支持を背景に一九九二年に選挙プロセスを中断して政権を掌握、FISは非合法化され、イスラーム主義者は苛烈な弾圧を受けた。政府および軍との対立の激化のなかで、FISその他のイスラーム主義集団から穏健派が排除され、急進派の人々は武器を取って戦うことを選択する。軍と武装イスラーム勢力が衝突を繰り返すうち、社会全体を背教者とみなし(このように、ムスリムを背教者とみなす行為は「タクフィール」と呼ばれる)、一般市民に対する無差別テロを行う「武装イスラーム集団」(Groupe islamique arme: GIA)のよ

うな組織が出現した。一九九六年

にGIA指導者となったアンタル・ズワービリーは、アルジェ近郊の複数の町の住民五〇〇人以上が虐殺された一九九七年夏の凄惨なテロ事件の後、市民の無差別殺戮を正当化して、国内ばかりか海外のイスラーム主義者の支持も失った。

AQIMの母体となったGSPCは、このような一般市民に対するタクフィールに反対し、政府や軍との戦闘を活動の中心とするべく、一九九八年にGIAから分離した集団である。AQIMの現在の活動も、アルジェリア軍との戦闘や政府機関を標的としたテロが主であり、サヘル地域においては外国権益(在外公館や企業)の攻撃と外国人誘拐である(表一)。

●「フランスの子供たち」から「キリスト教十字軍」へ

AQIMの言説は、反植民地主義とアイデンティティとしてのイスラームの強調という、内戦以前のアルジェリアのイスラーム主義者にみられた傾向の延長線上にある。かつてアルジェリアのイスラーム主義者は、FLN体制の腐敗、権威主義に対する人々の怒りから、多くの正当性を引き出した。

表1 AQIM周辺の主な事件

時期	出来事
2003年2月	GSPC、アルジェリアの砂漠で32人のヨーロッパ人観光客を誘拐（解放）
2007年1月	GSPC、イスラーム・マグレブのアル=カーイダ（AQIM）と改称
2007年4月	アルジェの首相府などに3件の自爆テロ、死者33名
2007年12月	モーリタニア・アレグでフランス人観光客4名殺害。翌年ダカール・ラリーのキャンセル アルジェの国連事務所などに2件の自爆テロ、死者41名
2008年2月	モーリタニア・ヌアクショットのイスラエル大使館襲撃 チュニジア南部にてオーストリア人観光客2名誘拐（解放）
2008年12月	ニジェールでカナダ人外交官2名誘拐（解放）
2009年1月	ニジェール・マリ国境にてヨーロッパ人観光客4人誘拐、イギリス人1名殺害
2009年6月	モーリタニア・ヌアクショットにてアメリカ人人道活動家殺害 ブルカ（ニカーブ）に関するサルコジ大統領の発言を非難する声明
2009年8月	モーリタニア・ヌアクショットのフランス大使館に対する自爆攻撃
2009年11-12月	マリ、モーリタニアで3件計6名のヨーロッパ人を誘拐（解放）（スペイン人3名、フランス人1名、イタリア人2名）
2009年12月	ニジェールのティラベリ州でサウジ人4人が武装グループに襲われ死亡
2010年4月	ニジェールでフランス人人道活動家ミシェル・ジェルマノ氏誘拐
2010年7月	ジェルマノ氏「殺害」声明
2010年9月	ニジェールのアールリットで7人のアレヴァ社員誘拐（フランス人5名、トーゴ人1名、マダガスカル人1名）
2011年1月	ニジェール・ニアメでフランス人2名を誘拐、殺害
2011年2月	アルジェリア南東部タドラルト地方でイタリア人旅行者誘拐（解放）
2011年11月	マリ北部にてヨーロッパ人など2件5名を誘拐（フランス人2名、オランダ人、スウェーデン人、イギリス/南アフリカ人）

（出所）筆者作成。

彼らは、独立後のアルジェリアが、ナシヨナリズム的な理念の下でアラブ化・イスラーム化政策を推進しながら、実際にはフランス風の教育を受けたり、フランスの利害と結びついた（と彼らがみなす）軍事的・政治的エリートによって支配されているとし、こうした国家エリートを「フランスの子供たち」と呼んで、国家とエリートに不満を持つ幅広い層の支持を集めた。とりわけ、八〇年代までに社会問題となっていた都市部の若年失業者層が、墮落した政府とのジハードを標榜する戦闘的イスラーム主義に惹きつけられたといわれ

る。この「国家エリートとそれを支援するフランス」対「敬虔な民衆」という対立が、AQIMにおいて「マグレブ諸政権とそれを支援する諸外国」対「マグレブの民衆」と広域的に捉えられている。アル=カーイダの世界観の基本は、「キリスト教的、シオニスト的な西洋世界、およびその利害と結びついたアラブの国家体制（＝彼ら）」対「西洋の植民地主義的な欲望の犠牲となっているムスリム（＝我々）」の二元論である。AQIMは、アルジェリアのイスラーム主義者のイデオロギーを、

アル=カーイダの国際ジハード路線に沿って発展させたといえる。国際ジハード路線は、二〇〇四年以降GSPC/AQIMの実権を握るアブ・ムスアブ・アブドゥルワドゥードによって推し進められた。AQIMの攻撃対象は地域の欧米（特にフランス）権益と、それに操られている（と彼らが見なす）各国現地政権である。二〇一一年一月のAQIMの声明では、「十字軍とユダヤ教徒」の「傀儡統治者」として、チュニジアのベン・アリ大統領、アルジェリアのブーテフリカ大統領、モロッコのムハンマド六世、リビアのカダフィ大佐が挙げられている。標的に対する自爆テロという手法、地域有力者との協力関係構築を通じて新たな勢力圏を獲得していく方法は、ビン・ラディンとザルカーウィーの指揮するアル=カーイダ「本部」に倣ったとされる。

しる、サヘル諸国において危惧されている。なぜなのか。ジハード主義のイデオロギーでは、戦闘が少数の集団によって、山岳地帯などの社会から隔絶した場所で行われていても、それこそが外敵から社会を守る戦いの前線であるとされる。少数精鋭集団によるジハードという主題は、ジハード主義者に大きな影響を与えているエジプトのムスリム同胞団のサイイド・クトゥブ（一九〇六～六六年）著『道標』（一九六四年）に見られる。GSPC/AQIMは、一般ムスリムに対するタクフィールは避けるものの、ジハード主義のこのような発想を基本的に引き継いでいる。AQIMによれば、故郷と家族を捨てて山で戦うことによって、AQIM兵士は不正な欧米や現地政権とのジハードの前衛に立つ。その他のムスリムたちは、AQIMに加わるか、彼らを援助すべきとされる。「アラブの春」の先触れとなったアルジェリア、チュニジアにおける民衆抗議行動に応答して、二〇一一年一月に出した声明のなかでAQIMは、この抗議行動をAQIMのジハードと結び付けるべく、民衆に以下のように呼びかけた。

●「アラブの春」後のAQIM

国際展開にもかかわらず、いわゆる「アラブの春」後のAQIMは、アルジェリアやマグレブ諸国の体制の安定を脅かす存在ではなくなりつつあり、その影響力はむ

あなた方が現在、公正と権利回復のためにやっている戦いは、あなた方の同胞であるジハード戦士たちの戦いそのものである。ジハード戦士たちは、あなた方の家々の向かいにある山々で戦いに従事している。我々が家と家族と財産を後にしたのは、あなた方の宗教と、あなた方の現世の防衛のために他ならない。あなた方が求める変化のためには、宗教に背く支配者たちへの反逆と、神のシャリーアによる統治が必要である。シャリーアによつて、公正が支配し、真理と正義が戻るだろう。しかし、これらがもたらされるのは、シャリーアに合致したあらゆる手段を通じてジハードを行い、禁じられたことを否定し、この圧制者たちに反対することによつてのみである。山で従軍しているあなた方の同胞たちのジハードと戦闘、彼らに対するあなた方の身体と富による助けと支援、そして、あらゆる派閥のムスリムたちが罪深い圧制者たちに向かって立ち上がること、フランスの子供たちを信頼しないことを通じて、神のお許しにより約束された勝利が実現するだろう（参考文献①）。

AQIMの世界観では、悪しき政権との戦いにおいて前線にいるのはAQIMであり、民衆はあくまで彼らを補助する存在なのである。少数精鋭集団AQIMは、民衆のなかに分け入つてそれを内部から組織する運動ではなく、そのための組織的基盤も持たない。民衆運動たることを自ら拒否する点に、AQIMの社会運動としての限界がある。アソシエーションや選挙参加などの手段を排し、外国権益への攻撃や国家当局との武装闘争を志向するAQIMが、チュニジアやエジプトで起こつた労働組合や職業組合、党派性のない若者たちの緩やかな連帯の流れに掉さすのは困難だった。事実AQIMは、「アラブの春」の主要なアクターとなれなかったばかりか、「春」後のアラブ政治の大きな動きからも脇に置かれてしまつていく。

現在、政変後のチュニジア、エジプトにおいて、これまで弾圧を受けていたイスラーム政党が選挙戦に勝利し、政権参加するという新しい状況が生まれている。モロッコでも、穏健派イスラーム主義政党が組閣を果たした。このように、合法的な手段で活動するイ

スラーム政党が各国の選挙で躍進したことで、政権と対峙するイスラーム勢力としてのジハード主義集団のインパクトは薄れた。北アフリカの人々が、非暴力的手段での政治変革を望んだことも、ジハード主義が背景へと遠のいた要因のひとつである。折しも、オバマ時代の到来とともに、「テロとの戦い」が民主化の代わりに世界中にもたらした戦火と混乱が批判され、九・一一以降のアメリカの介入主義が見直されていた。二〇一一年五月にはビン・ラディンが殺害されたが、より深層で「アラブの春」は、西洋文明とイスラーム文明の衝突という、アル・カーイダの世界観の前提を崩したのである。

しかし、リビア内戦が引き起こした混乱を、AQIMは見逃さなかった。カダフィがサハラ以南の諸国から呼び集めた傭兵と支給した武器は、カダフィの死後、サハラ以南の諸地域の武装化をもたらした。チュニジアやリビアの不安定化した国境地帯が、武器や麻薬の輸送、イスラーム主義集団の軍事訓練の舞台となっている。アルジェリア国内のAQIMは、憲兵や警察に対するテロ攻撃を繰り返

し、軍はこれに対し、AQIMの拠点であるカビール地方の山岳地帯の掃討戦を行った（二〇一二年六月七月）。これと平行して、サヘル AQIMも根強い活動を見せている。

### ●サヘル AQIMの土着化？

二〇一二年のマリ危機において、AQIMのサヘル部隊は、マリ北部を有効支配するイスラーム勢力のひとつとされ、着目されている。サヘル AQIMの起源は、GSPCがアルジェリア南部で引き起こした二〇〇三年のヨーロッパ人観光客三二人拉致事件に遡る。マリ北部に監禁された人質の一部は身代金と引き換えに解放されたが、この際、GSPCの指導者の一人ムフタール・ベルムフタールがマリ北部へ亡命を果たした。彼の活動により、サヘルはGSPCの第二の軍事拠点となった。マリ危機の開始まで、AQIMとマリ当局との大規模な戦闘はほとんどなく、外国権益の攻撃と外国人誘拐が問題視されていた。外国人人質は多くの場合対外プロパガンダや取引のために利用され、解放されたが、殺害されるケースもあった。



二〇〇三年来サヘルのアQIMは、外来集団であることに甘んじず、地域社会を取り込む努力をしてきた。サヘル地域への浸透は、経済と人を通じてなされた。麻薬輸送や不法移民の手引きなど闇ビジネスの展開を通じて、A Q I Mはマリ北部の地域社会に経済的影響力行使している。また、指導者ベルムフタールが現地の有力者の女性と婚姻関係を結んでいるほか、A Q I Mは地元のムスリムを兵士や司令官として採用しており、彼らの人的ネットワークを利用している。A Q I Mと協調しつつ現在マリ北部統治の実権を掌握しているとされるイスラーム主義武装集団「アンサール・アツィン」の指導者が、二〇〇三年以来A Q I Mとの関係を持つマリ人のトゥアレグ人、イヤド・アグ・ガリであることは、偶然ではない。

A Q I Mは、G S P Cが北部マリに進出するきっかけとなった前記のヨーロッパ人観光客拉致事件において、G S P Cとヨーロッパ諸国政府の交渉を仲介し、人質解放に貢献したとされる人物である。A Q I M側から見ればアンサール・アツィンは、A Q I Mに欠けている地域的基盤を提

供し、都合のよい外交チャンネルになってくれる現地パートナーである。アンサール・アツィンに対し、A Q I Mは豊富な資金と軍事テクノロジーの恩恵をもたらす。アンサール・アツィンとA Q I Mとの関係は、前者が後者の傘下にあるというよりも、二者が利害の一致によって協力関係を築いたものと見ていいだろう。

A Q I Mのサヘルでの活動が長期化した背景に、地域社会の政治的・社会的・経済的な脆弱性がある。A Q I Mの軍事拠点とされるマリ北部、テロ活動の盛んなニジェール北部は、九〇年代、二〇〇〇年代に中央政府に対する住民の武装蜂起が起こった地域である(参考文献②③)。マリ、ニジェール北部の不安定な問題は、植民地時代に遡る古い問題である。しかしこれは、トゥアレグの「民族問題」、キリスト教対イスラームの「宗教問題」というよりも、低開発の問題—国家サービス(教育、福祉、産業政策)の恩恵を受けたという住民たちの願望に、国家が十分に応答してこなかったこと—が、地域や共同体に対する差別の問題として認識されていること

に根本的に起因すると考えられる。マリ、ニジェール北部は、低開発に加え、度重なる武装蜂起で政府や国際NGOからの支援が遠のいたことによる慢性的な貧困と、党派対立や伝統権威の崩壊による内部からの不安定化を被っていた。この脆弱性に付け込み、豊富な活動資金と政治的影響力に物をいわせて地域に寄生したのが、A Q I Mだといえる。

さらに、A Q I Mにはイデオロギー的な動員力もある。貧しいサヘル諸国の経済、軍事、外交における対外依存は、産油国アルジェリア以上に強い。例えば、ニジェール北部のアーリットを中心とする地域にウラン鉱山があるが、この開発を独占的に担っているのが、フランスの原子力エネルギー会社アレヴァ社である。A Q I Mは、二〇一〇年九月にアレヴァ社の社員七名を誘拐する事件を起こした際、アレヴァ社は地域社会から不当な搾取を行っているとして拉致を正当化した。アーリットの鉱山開発については、ニジェール人社会への差別的な待遇や、放射線による環境汚染といった問題が、現地NGOなどによって報告されている事実がある。

アルジェリアやサヘルが依然として植民地同然だというA Q I Mの主張の是非を知るには、各国の独立以来のステート・ビルディングのあり方を慎重に再検討せねばならない。しかし、サヘルの国境地帯は各国内部でもともと開発から取り残された地域であり、この低開発の問題が、欧米とその傀儡政府による搾取として体験されている現実が存在する。アルカイダの二元論がまだリアリティを持つ地域がある限り、そこにA Q I Mの進展にとってきわめて好都合な環境があることを、忘れてはならない。

(わたなべ しょうこ/アジア経済研究所 中東研究グループ)

《参考文献》

- ①Abū Mus‘ab ‘Abd al-Wadūd. “Nida’ liā ahli-nā al-thā’ irīm fi al-Jazā’ ir.” January 13, 2011.
- ②Mohamed Tiessa-Farma Maiga. *Le Mali: De la secheresse à la rebellion nomade*. Paris: Harmattan, 1997.
- ③Pierre Boilley. *Les Touaregs Kel Adagh*. Paris: Karthala, 1999.